

その後も、お母さんは食料集めに走りまわり、お父さんは身のまわりの物を取りに行くなどして、一日が、あっと言う間に過ぎていった。

そして、両親がいそがしくしている間、妹と弟が、ずっとぼくのそばにいることに気がついた。いつもはけんかをするけれど、妹は、夜もぼくの手をにぎってねる日が続いた。妹や弟がぼくをたよりにしていると思ったとき、家族の大切さがわかった気がした。

それから、二週間ほどたったころ、ぼくたちは、おじいちゃんの家に行った。

そこで、おじいちゃんもおばあちゃんも、おじちゃんもいとこも、みんなぼくたちのすがたを見て、安心してくれた。おじいちゃんは、

「ガスも水道も出るようになるまで帰るな。」

と言ってくれた。ここにも、ぼくたちのことを心配してくれる人がいるんだと思った。

学校がさい開すると、先生や友達がいた。

この地しんによって、ぼくには、たくさんの人が、いつもそばにいて、知ることができた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。